



重い心臓疾患のある次女・佳美さんを何としても救いたいと思ったことがきっかけで、救命用カテーテルを開発した「東海メディカルプロダクツ」(本社・愛知県春日井市)の社長、筒井宣政さん(71)。「人間、できると思っ

救命用カテーテルを開発した
東海メディカルプロダクツ

筒井宣政さんと次女

佳美さんの写真を手に開発の思い出を語る筒井さん



名古屋市東区出身。先天性心臓疾患を抱える佳美さんは9歳の時、「現代医学では手術が不可能」と宣告された。それでも諦めきれず、アメリカでの治療に望みを託したが無理とわかり、手術のためにためた資金の寄付を考えた。ところが、主治医からは「人工心臓の研究をしてみたら」と意外なアドバイスを受け、会社を設立して研究を始めた。佳美さんは23歳で亡くなったが、こうした開発の経緯はテレビドラマにもなった。

「できる」が持論で、ゼロからスタートして欧米メーカーが多くを占めるこの分野で、同社を国内トップメーカーに育てあげた。



1964年に大学の経済学部を出て、父が経営する樹脂加工会社に入りました。ほどなく、父が連帯保証する友人の借金が焦げ付き、返済に70年はかかるほどの借金を抱え

英語も不十分なままナイジェリアに飛び込んだのです。最初は、相手にされませんでした。現地で知り合った貿易商の祖母が亡くなったと聞き、炎天下、朝から晩まで続く吊いの踊りに1週間通いました。出される食べ物やヤシ酒も現地の人と一緒に。これで信頼を得て商品を扱ってもらったのです。

カテーテルの開発に、国内で初めて成功しました。でも、その経緯は、妻の陽子と二人で医学書を読みあさる、まったくの独学からのスタートです。医学知識もないままに、高名な先生の研究室に通い、分からないことは何でも聞きました。

娘をただ助けたい一心

胸手術をしなくても血流を流せるように工夫したのですが、たものですが、

込んでいることを知りませんでした。いきなり崖っぷちに立たされたわけです。それからは、「もうかる仕事は」と必死です。そんな時にピンと来たのが、西アフリカの女性たちが、木綿の髪留めがほどけ、髪形が型崩れて困っているという商社マンのひと言です。

「ビニールチューブの髪留めなら崩れない。自社で作って売れないか」と思い立ち、

ガルからカメルーンまで、西アフリカの一大ファッションに。借金は7年で完済です。この時の経験が、会社経営のすべてを教えてくれました。救命用カテーテルを作ったときも同じです。娘をただ助けたい一心でした。

寝ていた真夜中に、突然アイデアが浮かびました。妻を起こさないよう、開いていた近くのスナックに駆け込んで、朝まで夢中で図面を書いたことを思い出します。

「太ももから大動脈に挿入し、患部近くで風船形の器具を収縮させて、心臓の動きを助けるIABP(大動脈内バルーンパンピング)バルーン

もつけることより、人の命を救いたい。娘を助けることはできませんでしたが、私たちに残してくれた娘の大切な教訓だと思っています。

(聞き手・柴田永治)



西アフリカのナイジェリアで髪留めの商談をしていた頃の筒井さん(正面奥、左のメガネの男性)